

令和6年度中国・南昌市への青少年訪問団派遣事業 事後報告書

◆名前： 藤田 実紅

江西省及び南昌市に滞在中の様子や本事業で得たこと、感想等をご記入ください。
(1, 000字程度)

中国に1週間滞在し、多くの学びを得た。中国語が分からない私にとって、英語の説明なら読めばだいたい理解できたので助かり、英語の大切さを感じた。しかし、観光地で買い物をするときは身振り手振りで意思疎通できることもあったが、頭の中で即座に英文を作れずスムーズに話せないことも多々あった。国際友好都市青年エリート対話で英語のスピーチを聞く際はネイティブレベルの英語で、話すのが速く感じてあまり理解できなかった。自分は英語のスピーキングとリスニングが苦手であることを痛感したのでそれらを克服し、実際に英語を使えるように勉強して、将来に役立てたい。

次に高松市の友好都市である南昌市について学んだことや感じたことを述べる。中国に着き、空港からバスに乗って最初に辿り着いたのが南昌であった。街を見ると大規模で迫力のある建物が多く並んでいるのが印象的だった。日本は地震大国のため、地震対策の影響もあって建築基準法が厳しく、中国のように大規模な建築はあまりないので新鮮だった。南昌市日中友好会館の見学では、南昌市と高松市の昔からの関わりを知ることができた。館内には日本庭園や和室があり、日本語を学ぶ中国の学生がそこで日本の文化を学んでいることも知った。

最後に景德鎮で学んだことや感じたことを述べる。景德鎮には古くから陶器づくりが行われてきた街並みが保存されており、複数の陶器の博物館を見学したことで、景德鎮の陶器づくりの長い歴史を感じた。景德鎮には伝統的な陶器から現代的な陶器まで、豊富な種類の陶器が職人によって作られていることが分かった。今回の派遣事業で陶器づくりを体験したが、想像していた以上に形を綺麗に作るのが難しかったので陶器職人の技術の高さを実感した。陶芸作家による個性豊かな作品が並ぶアトリエも多くあり、見るだけでも楽しい場所だった。私は景德鎮で陶器を買ったときに、陶器の会社の社長さんの話を聞くことができた。その会社は日本の企業と協力して商品を生み出していたり、日本でも数々の有名な陶器があるのでお互いのために日本と勉強会をしたりするという話を聞いて、中国と日本の産業の繋がりを感じた。また、私は大学で建築を学んでいることもあって中国の建築からは様々なインスピレーションを受けた。景德鎮に限らないが中国は全体的に意匠性の高い建築が多い。特に景德鎮は世界的に有名な陶器の街であることもあって、陶器をモチーフにした特徴的な建築や、陶器で装飾された街灯、陶器の欠片が埋め込まれた道、陶器を焼く窯をモチーフにした建築などがあり、景德鎮の街並み全体が陶器を彷彿とさせていた。このような地域の特産物や資源を活かした建築、街並みは、その地域の良さを最大限に引き出し、人々を魅了させる力があると実感した。私も将来、景德鎮にある建築のように地域の特産物や資源を活かした魅力的な建築をつくり、建築を通して日本の地域活性化に貢献したいと考えた。